

四旬節第4主日

福音朗読 ヨハネ 9・1-41

2026.3.15

カトリック高円寺教会 9:30 ミサ

浅井太郎神父

(日本カトリック神学院養成者、名古屋教区司祭)

長い朗読が読まれました。助祭叙階を受けたばかりのニティンさん、日本語が大変でしょうからお気の毒にと思いながら、しかし彼のせいではなく、わたしが長い方をお願いしますとあえて頼みました。四旬節ですから、長い朗読に耐えるということも一つの犠牲、ということと同時に、「聖書と典礼」の中で省かれている——読まれない——、長いところであれば読まれる箇所では気になるところがあったので、むしろ読んでいただいたわけです。

「聖書と典礼」の中には書いてありませんが、長いものだと「わたしがこの世に来たのは、裁くためである」(ヨハネ 9・39)と書いてあって、ある意味、ギクツとするわけですね。ギクツとする。今わたしたちは教会に来ると、イエス様は優しい方、赦しを与えてくださる方、救われるっていうことを強く言われていますので、こういうイエス様の言葉を聞くとギクツとするんですね。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである」。

脅すためというような福音宣教の方法は賢い、賢明とは思いませんが、しかし一方で、やはり、わたしたちの信仰箇条から言って、イエス様の再臨——この世の終わりの時にこの世に来られ、裁かれるということは、一方で信じるべきことでもあります。

もちろん、あの人、この人、誰が救われて、誰が救われないという、そういう話ではありませんが、そして、父なる神の^{みこころ}聖心はすべての人を救うことであるのは間違いないわけですが、しかし一方で、わたしたちの罪が赦されるということは、「いいよ、いいよ」で大目に見るということではなく、わたしたちが罪の状態から解放されて、人としてより善い者になるという、それが罪の赦しの意味です。つまり、わたしたちが

より善い者となる、罪から脱出することができる、解放される、自由になる。それが赦しの本当の意味ということになります。

皆さん、この中には教会に来たばかりの人もいれば、もう何十年と教会にいる方もいらっしゃるかと思います。特に成人洗礼の方であれば、今日この福音に読まれた、目の見えない人の話をどこかで共感を持って読むことができるのではないのでしょうか。実際に目が見えないところから目が見えるようになるということも一つの奇跡、身体的な癒しではありますが、イエス様は必ずしも身体的な癒しのためだけに来られたわけではないわけです。

もちろん身体的な癒しを得られる方もいますが、あるいはルルドでも病気の癒しということが実際に起きていますけども、すべての人が身体的にも癒されるとは限らない。むしろ身体的な癒しを通して——一つのしるしとして——精神的な面での人の癒し、心の、精神の癒しということがイエス様の救いの意味であるということを知らせるために、人によっては身体的な癒しも与えられることがあるということです。

おそらく、そのようなイエス様との出会いがあり、今まで見えなかった心の目がイエス様を認めることができるようになった、その救いの喜びから、皆さんはこの教会に足を運びミサに与るようになられたんだらうと思うわけです。イエス様と出会うということは、わたしたちが変えられる、根本的に生き方を変えられる体験です。

そして、イエス様に出会うと、いったいこの方はどんな方なんだらうという問いが生じてくるものです。不思議な方です。問いが生じてくるということ自体、出会ったしるし。それまで、出会っていなければ、イエス・キリストという名前に関心を持つことさえなかった、全然自分の興味関心の外にあった方が、なんでこの方に興味が湧くんだらう、この方っていったいどんな方なんだらう？ それはどこかで触れたから、あるいはイエス様がどこかで語りかけていてくださるからこそ、わたしたちはイエス様という方に興味を抱くことができるのであります。

イエス様はどこにおられるのか。今日ここでも言われています。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ」(ヨハネ 9・37)とされています。ここにおられる。もちろん、わたしは司式者として立っていますが、わたし自身はあくまでわたしであって、イエス様ではありませんが、この司祭、あるいはこの共同体の中にイエス様がおられ、語っておられる。語りかけておられる。わたしのこの

言葉がそのままイエス様の言葉では当然ありませんが、しかし、この言葉を通して皆様の中でそれぞれの状況に応じてイエス様が何事かを今語りかけておられるはずで
す。その言葉を信じる、受け入れる。そこに信仰が始まるわけです。

信仰が人を救うわけですが、しかし、ともすると信仰がいつの間にか固まってしま
う。

今日の話は実はただの癒しの話ではないですね。イエス様が癒された後、討論に
なっているわけじゃないですか。癒された人とユダヤ人たちとの間のやり取りになっ
ている。いったいイエス様という方がどういう方なのかということが、今日の福音の
中心になっています。

わたしたちはイエス様と触れ、出会い、そしてイエス様を信じるようになった。し
かしそこで留まっていたはならなくて、実際イエス様がどういう方なのかより深く知
るよう招かれています。信仰を理解する必要があるということになります。そうし
ないと、いつの間にかわたしたちは自分の理解でイエス様ということを決めつけてし
まう。あるいは、生き方というものを根本的に変えられたにもかかわらず、いつの間
にか自分の中で物事を割り切って、自分の中に閉じこもってしまう。あるいは、どこ
かで慢心が生じてしまうものです。

わたしたち、イエス様に出会う前は心の隙間があって、その心の隙間から何かを求
めてイエス様に出会って満たされて嬉しいわけですが、しかし、そのイエス様に満た
されたことの嬉しさから、いつの間にか有頂天になってしまう。信仰、わたしの信仰、
個人主義が入ってきてしまい、自己満足の信仰に陥ってしまうということが実は
往々にしてあるものです。わたしも成人洗礼で 20 代の前半に洗礼を受けましたが、
それから 30 年ぐらい経ち、ようやくそういうことが起きるんだなあということが分
かってきました。

信仰の道は自己満足の道ではないですね。むしろ、イエス様が十字架に架けられた
ように、このイエス様と一致して生きるのならば、実はどこかで苦しみを——正しい
けれども苦しみを——引き受けなければならない、そういうときがあるんだ。むしろ、
十字架を引き受けて生きることこそイエス様と一致して生きると、そういう生き方に
気がついてくるものです。どうにもならない苦しみや、悲しみ、不条理な痛みという
ものがあったりします。きっと皆さんも何かしら抱えておられるかもしれません。そ

んな時に、どうして、どうしてわたしばかりこんなことが起こるのかしらと嫌になってくるわけですが、しかし、そういったときこそ、実は真骨頂なのかもしれません。

一昨年、神学校の養成者のための養成講座というものがバチカンで、福音宣教省主催でありました。幸いにも 40 日間——ちょうど四旬節中——行かせてもらうことができました。2 年前ですね。その時、あるレクチャーである先生がこんな話をしていました。前の前の教皇様ベネディクト 16 世と高位の聖職者の方々がなんか話をしていた。その時、あるおそらく司教さん、偉い聖職者の方が「こんなこともあって、こんなこともあって」と言って教皇様に訴えかけていた。それを教皇様は黙って聞いていた。で、話が終わったときに、どうもこういうふうに言ったらしいんです——この部分だけ英語で覚えているのですが——“Truly you are right. But lost is strong conviction of Christ.” 「確かにあなたは正しい。しかし、失うことこそキリストへの強い確信だ」というふうに言ったんです。それを聞いて、他の司教様みんなシーンとなった。なるほどということですね。

わたしたちもついつい「なんで、なんで」という不平不満が出てきてしまいますが、しかしよく思い出してみれば、あの十字架にかかったイエス様ご自身、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ 27・46)って言っている。あのイエス様がなんでそんな弱いことを言うのだらうと思うんですが、しかし、それはまさしくわたしたち罪人の言葉に他ならない。罪人の声に他ならない。イエス様はわたしたちと同じものになってくださった。むしろあの十字架の上でわたしたちの声を語ってくださった。しかし、それでも皆さん知っている通りに、イエス様は復活された。終わりではない。わたしたちがどんなに苦しくて悲しくて、不平不満を呻いていても、述べていても、イエス様と一致しているならば、最後には、イエス様が復活したように、わたしたちも復活させていただけると、そんな希望の中に生きているわけです。

このイエス様との一致のお恵みの大きさを思い起こしながら、この四旬節、犠牲と節制を捧げながら、少しでもイエス様と一致することができるよう過ごしてまいりたい。またそのために祈ってまいりましょう。